

善を求めよ、悪を求めるな

日本聖公会京都教区司祭

三木 メイ

善を求めよ、悪を求めるな
お前たちが生きることができるために。
そうすれば、お前たちが言うように
万軍の神なる主は
お前たちと共にいてくださるだろう。
悪を憎み、善を愛せよ
また、町の門で正義を貫け。
あるいは、万軍の神なる主が
ヨセフの残りの者を
憐れんでくださることもあろう。
(アモス書 5 章 14-15 節)

急に秋の気配が感じられる季節になりました。秋学期の新しい科目の授業を受け始めたところだと思いますが、皆さんにとって、大学で学ぶ目的、学ぶ意味とはなんのでしょうか？将来、就職するために大学卒業という学歴が必要だから、でしょうか？何を目的に、どんな大学生活を送ろうか、それは皆さんの自由なのですが、大学での学びの意味、その目的はしっかり捉えてほしいと思います。特に、一般教養教育における学びが、皆さんにとって重要な意味をもっているはずなのですが、それが十分に理解されていないのではないかと私はかなり以前から憂慮しています。

「リベラルアーツ」という言葉を聞いたことありますか？その意味を知っているでしょうか？「自由な思考や生き方をするための総合的な人間力を養う学問」と説明されたりしますが、これは古代ギリシャに起源をもつ言葉です。社会のさまざまな課題に対して、広い視野をもって取り組む力、批判的な問題意識と論理的な思考力、感受性豊かなコミュニケーション力、そして問題解決の道を探求していく力、それらを養っていく基礎を作っていくのが「リベラルアーツ教育」だと言えるでしょう。実際にこれらの力を養うには、まずちゃんと目的意識をもって学ぶこと、そしてその学びを踏まえて自分で物事を考え、模索し、探求していく意欲をもつことが必要不可欠です。この「リベラルアーツ」が「一般教養」という日本語に置き換えられたことで、本来の大切な意味が見失われることになったのではないかと思います。

さて、今日の聖書箇所のお話をしましょう。旧約聖書のアモス書は、紀元前8世紀頃に活動をした預言者アモスの言葉として記されています。約2700年前ですから、彼はもちろんリベラルアーツ教育を受けていません。けれど、当時の社会の問題に鋭くメスを入れ、批判的な言葉でもって、この時代の社会の問題にきちんと取り組むべきだ、と発言した人物だと言えます。

アモスの時代においては、イスラエルの民は、北イスラエル王国と南ユダ王国の二つに分裂していました。北イスラエルは経済的に発展していて、支配階級の人たちは贅沢な生活をしていました。その中には不正を行なって私腹を肥やす者もいたようです。一方、南ユダ王国は貧しい状態が続き苦悩している人々が多かったのです。しかし、北イスラエルは南ユダの人々に経済的支援をしませんでした。それで、アモスは北イスラエルの都サマリヤに行って「不正をして富を蓄え、貧しい人々をますます苦しめる、そんなことをしていたら、神の怒りと罰が下るぞ」という警告の預言をしていたのです。今日のテーマの「善を求めよ、悪を求めな」という言葉は、そういう状況の中で語られた言葉です。それがこうして聖書に残されているのは、彼の言葉の中に神の意思が確かに表されている、と多くの人たちが信じたからでしょう。

アモスは、神がこの金持ちと貧しい人たちをご覧になったらどう思われるだろうか、という視点で貧富の差の問題を捉え、このままにしておいてはいけなさと考えて、自ら名乗り出て、批判的な預言を語り伝えたのだと思われます。それはおそらく当時は命の危険を伴う行動だったはずです。

現代社会においては、世界規模の経済格差が起こっています。それは今後さらに拡大していくでしょう。それだけでなく環境問題や差別や人権に関わる問題、戦争と核兵器の問題など、多くの複雑で多様な問題が山積しています。それでもあきらめなくて、何が本当の「善」なのか「悪」なのか、「正義」とは何か、「平和」とは何か、どうしたら問題解決に近づくことができるのか、それを探求し続ける人間の「力」が必要です。

ただ一つ言っておきたいのですが、これが答えだと思ったとしても、人間は判断を間違ってしまう場合があります。何が「善」か「悪」か、最終的にその真実を知っているのは神のみであることが聖書に記されています。ほとんどの「悪」は、人間が自己中心的な欲望に振り回される時に起こります。それに対する警告は何度も聖書の中に記されています。だからこそ、私はリベラルアーツ教育のなかで聖書を学ぶことが重要だ、と考えているのです。

皆さんが、真理を探求する力を養い、善を求めて、悪を求めず、自分の道を自分で見出し、本当の自由を得ることができるよう、心から祈っています。